

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



Index

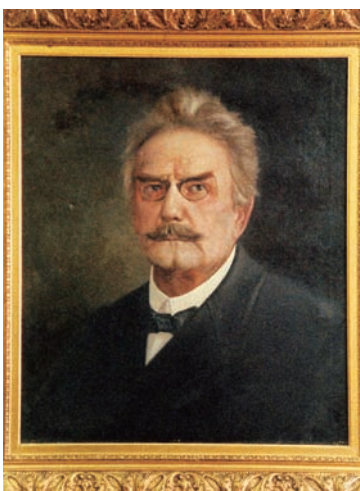
- 2 ハンス・モーリッシュを訪ねて
生命科学研究所 片岡 博尚
- 6 資料の公開について
- 7 史料館のうごき
- 8 お知らせ

- 上 ハンス・モーリッシュの机
- 左下 モーリッシュの肖像画
(理学研究科生物・地学共通講義室に掲げられている)
モーリッシュ木製胸像
(ウーン大学植物学教室蔵)
- 右下 クルマバソウ
(宮城県七ヶ宿町に自生)

ハンス・モーリッシュの机

史料館展示室内にさりげなく置かれている写真の机。格別人目を引くこともない普通の机ですが、これも展示物の一つです。植物学者ハンス・モーリッシュが使用していた机と伝えられ、「〔東北〕帝大 植物学科」の焼印があります。

モーリッシュは、東北大学拡充期、理学部のなかではやや立ち遅れていた生物学教室の体制を整えるため招聘されました。在任中、仙台だけではなく日本各地の植物を観察・研究しています。来仙後まもないころ、



アインシュタインが東北大学を訪れ、工学部会議室の壁に二人でサインを記念に残しました。残念ながらこれは焼失してしまいましたが、サイン帳に記した小さなサインは、今でも史料館で見ることができます。

(こちらの写真については、次頁からの寄稿を御覧下さい)



ハンス・モーリッシュを訪ねて

東北大学生命科学研究科准教授

片岡 博尚

<http://www.ige.tohoku.ac.jp/outou/outou-j/kataoka-j.html>



ハンス・モーリッシュ (Hans Molisch) は1922年に当時の東北帝国大学が生物学科を創設する際に招聘したドイツ人植物生理学者である。モーリッシュは1856年当時モラビアのブリュンで生まれた。メンデルの修道院が隣であった。メンデルの影響で彼も植物学を目指したという。彼は植物生理学の父として著名なヴィルヘルム・ペッフアーの所へ行きかけたようだが、それが果たせず、ウイーン大学のユリウス・ヴィズナーのもとで植物解剖学や植物生理学を学んだ。1880年学位取得後母校で助手・講師を勤め、プラハ大学教授などを経て、1909年ヴィズナーの後を継いでウイーン大学の教授となった。第一次世界大戦後の極度に疲弊したウイーンで研究室運営に苦勞していた1921年、東北大学から招聘状が届いた。1898年ジャワでの調査旅行の帰路一度日本に立ち寄ったことのある彼は喜んでこの招聘を受けた。仙台へ来たときモーリッシュはすでに65才であった。2年半を東北大学で過ごして1925年に帰国し、後にウイーン大学総長になった。そして亡くなったのは1937年、81才であった。

モーリッシュの東北大学での生活については理学部生物学科の卒業生、渋谷章の「回想のモーリッシュ」(内田老鶴圃新社、1979)や、瀬野文教によるモーリッシュの回想記(日の出ずる国にて)の翻訳、「植物学者モーリッシュの大正ニッポン観察記」(草思社、2003年)に詳しい。なかでも後者はモーリッシュが当時の日本社会をどう見ていたかを知る上で特に興味深い。私は2007年にウイーン大学を訪問し、モーリッシュの1937年の肉声を録音したテープを入手した。この中でモーリッシュが話した内容(資料1)を紹介し、モーリッシュの著書の一部を用いてあまり語られることのない彼の生物学教育への情熱をお伝えしたい。

私がモーリッシュを知ったのは1970年代初頭である。大阪大学大学院でフシナシミドロという藻類の光生物学を始めたころ、仙台近郊で採集したフシナシミドロが細胞内に多量の蛋白質結晶を含んでいたというモーリッシュの報告を東北帝国大学紀要に見つけたのである。いつか仙台を訪れたいものと思っていたところ、1976年に片平の東北大学農学研究所(当時)に教務職員として赴任することになった。実はより太い絆がこれ以前にできていた。神戸大学理学部で卒論研究の指導教官だった和田俊司先生は1971年に母校の東北大学植物生理学研究室に助教授として戻っておられた。さっそく青葉山に恩師を訪ねた私に先生は自分の机を指して言われた。「これはモーリッシュの使っていた机なんだ」と。その机はいま史料館にある(表紙上の写真)。この絆はさらに太かった。和田俊司先生が新潟の高校時代、2年間にわたりモーリッシュの助手であった相馬悌介から生物学を教わったことを知ったのは本稿の脱稿寸前の7月末のことである。

訪れた理学部の講義室にはモーリッシュの肖像画(表紙 左下の写真)が懸かっていた。この肖像画はよく「容貌魁偉な」と紹介されている。モーリッシュも相馬悌介に「君の子供にこれが鬼だよと教えてやるがいい」と言っていたらしい。だが、私は少なからぬ違和感を抱いた。私の目には容貌魁偉にも鬼にも写らなかったのである。いったい真実のモーリッシュはどんな容貌だったのだろう。これを確かめる機会がついに2007年に訪れた。オーストリア西部のクムンデンで開かれた国際細胞内共生学会の帰路ウイーンを訪ねたのである。分子生物学などの新しい学問分野は市南部に引っ越していたが、植物生理学研究室は Schottentor に残っていた。ここも改修中とのことで、モーリッシュ関係の展示物の多くは倉庫に収められていたが、玄関の広いロビーの一角にモーリッシュの木製の胸像が奇麗に磨かれて立っていた(表紙 左下の写真)。威厳に満ち

たその容貌はなんと東北大学の肖像画と瓜二つであった。共に相馬梯介が撮影した写真を使ったのだろう。疲弊した故国を想いながら、異国で研究に打ち込む科学者の真剣な表情を写したものと思う。



写真 ウィーン大学植物生理学研究所の記念帳。吉井義次、日比野信一、八木秀次ら東北大学関係者の外、木原均、柴田桂太、その弟子神谷宣郎、神谷を戦時中かくまったアメリカの粘菌学者 Seifriz、インドール酢酸の発見者 Kögl、1930年にテローム説を唱えたドイツ・チュービンゲンの W. Zimmermann などの署名が見える。

ウィーン大学名誉教授でウィーン市学術博物館長を勤めている W. G. Url 博士がモーリッシュの始めた植物生理学研究所の記名簿を見せてくださり、日本人訪問者の署名のある頁を複写して下さった。左の写真はいくつかの署名を転写したものである。吉井義次、日比野信一、八木秀次ら東北大学関係者の名前も見える。この記名簿の冒頭にモーリッシュは次のように書いている。

「ウィーン大学の植物生理学研究所を誰が訪れ、去っていったか、また、どのような輝かしい植物学者、自然科学者やその他の分野の人物がこの客人であったかが、将来大いに興味深いこととなるでしょう。(中略)一つ屋根の下で付き合う人々が、その人物に一定の特色を与えるように、永い年月の間に一つの研究所に現れる訪問客からも、その研究所が学問の世界と交わってきた様々な関係を読み取ることができるでしょう。(後略)ハンス・モーリッシュ、ウィーンにて1910年5月23日」(片岡・田澤訳；手書き文を F. Sondermann 先生に書き起こしてもらった。)

Url 博士はまた、モーリッシュが1937年5月、ウィーン市ブルクガルテンにある、1913年に建造されたという日本庭園でラジオインタビューに応じたときの録音を再生したテープを下さった。当時のレコード盤は内側から外に向けて録音されていただけでなく、ひどく破損していたという。81才とは思えない若々しい声であるが、モーリッシュのドイツ語はノイズに埋もれて聞き取れなかった。これを最近、東北学院大教授で東北大学でドイツ語の非常勤講師も勤めておられる F. ゾンダマン先生が聞き取ってくださった。1937年5月は亡くなる7ヶ月前のことである。それにモーリッシュが仙台にいたのは85年も前のことである。彼が見た日本は今の日本ではないが、このインタビューから、当時の日本人の植物や自然に対するおそれや崇敬の情がよみがえってくる(資料1)。それは現在の我々が失ってしまったものである。「日本人にとっては植物も魂を持った存在なのです」と話す彼の胸にはどのような仙台での思い出が去来していたのであろう。

東北大学でモーリッシュの弟子が育たなかったのは、彼がペツファーの弟子でなかったからと言われる。たしかに後任の山口弥輔も吉井義次もペツファーの元に留学した東京大学の三好学の弟子だった。現在まで日本の植物生理学は全てペツファーに因む。レベルが高すぎたのが不運だったのかも知れない。二つの大戦の間という時代のせいもあるだろう。しかし、東北大学はモーリッシュを研究者としてだけでなく、教育者としてもっと高く評価すべきであろう。彼の重要な研究のいくつかは東北大学で行われた。例えば、光合成の明反応が死んだ細胞でも起こるといふ発見。この発見は後にイギリス人ロバート・ヒルの名前を冠してヒル反応として知られている。あるいは、ノウゼンハレンの葉に自分の顔写真のネガを貼り付け、光合成産物であるデンプン量の差をヨード反応によるポジ像として浮かび上がらせた有名な実験などである。

モーリッシュには生物学教育上有名な著作がある。これは高校教師や大学生向きの植物学実験の指南書であるが、版を重ね、最新版はモーリッシュとドバートによる改訂5版、「簡単な道具でできる植物の実験と観察」

(Molisch-Dobat “Botanische Versuche und Beobachtungen mit einfachen Mitteln” 5. Auflage. Gustav Fischer Verlag, 1979)である。私はこの本を買ったのか貰ったのか思い出せないが1980年に入手した。この本の冒頭にモーリッシュの信条が書いてある。「実験は単純であればあるほど美しい」。彼は教師が学生たちを連れて野外実習をするとき、学生たちに、いったいその植物がなぜ重要でどこが面白いのかを、手にとって即時に伝えることが重要だと説く。学問の発展と継承は若者に託されている。自然の中に若者を惹きつけるものはまだいっぱいあるのだ、というのである。片平のモーリッシュの作った植物園に今も生えているアオキ (*Aukuba japonica*)の葉を使った実験も、ノウゼンハレンに浮かんだモーリッシュの顔写真も載っている。一読して内容の豊かさとおもしろさに引き込まれ、一冊を全訳することにした。平易なドイツ語で書かれていたので、難なく訳すことができた。全訂5版だが各所にモーリッシュ特有の言い回しが残っていて、まるでモーリッシュの講義を間近に聞いているような錯覚に陥ったものである。

理由があって(訳者まえがき参照)この翻訳は刊行していないが、CDに焼いて史料館に置かせて貰うので、読んでいただければ幸いである。この中の興味深い一節を転載して筆を措こう。クルマバソウは枯死するとクマリンの香気が出る。彼はクルマバソウを用いたワインカクテル、“5月のカップ”のレシピをあげて説明している。数年前、私は宮城県七ヶ宿で偶然クルマバソウを見つけた(表紙 右下の写真)。さっそく葉をちぎって臭いを嗅いだところ、ちゃんとサクラ餅と同じクマリンの香りがするではないか。数株を我が家の庭に移植した。翌年5月、白い花を咲かせたクルマバソウを刈り取ってレシピどおりに“5月のカップ”を作ってみた。どんな味かって?皆さんもクルマバソウを探して試みあれ。詳しい採取地はヒミツ。絶滅すると困りますから。

モーリッシュは仙台を去る時、吉井義次に次のような言葉を贈った。「故郷しか見たことのない自然科学者は自然の一部を知ったに過ぎない」。これもモーリッシュならではの含蓄ある言葉である。

17. クマリン

材料：クマリンを含む植物。

5月から6月にかけて、ブナやその他の広葉混成林の陰になった林床でしばしばクルマバソウ(アカネ科, *Galium odoratum* 現在は *Asperula odorata* と改名)を見かける。この植物が“5月のカップ”(クルマバソウ入りワイン)に入れる植物として名高いのは、クマリンを含んでいるからである。その魅惑的な芳香は萎れたり乾いたりして、前駆体が分解すると生じる。クマリン含量は開花前に高くなるので、“5月のカップ”に使うには、若い、花の咲く前の植物を集め、数時間萎れさせてから処理をする必要がある。すなわち、細胞が死んでから香るのである。テキサス産でヨーロッパではグランドカバーとして使われているアゲラタム (*Ageratum mexicanum*)でも同じである。秋、最初の霜でアゲラタムの花壇は全滅する。すると凍った植物が周りの空気をクマリンのいい香りで満たすのである。これらは、細胞が生きているうちは存在しなくて、死ぬとはじめて物質が作られることの好例といえよう。干し草のいい香りも同様で、新鮮な草には全く、あるいはごく微量しか含まれない物質が、乾いてから作られるのである。乾燥させたこれらの植物の葉や、細かく切った酸果桜桃の樹皮を演習 No. 16 に書いた方法で熱してみよう。スライドグラスに凝結したクマリンの結晶はすべすべした板状、あるいは細い針状や湾曲した形をしている。クルマバソウのクマリンは“5月のカップ”以外にもデザートやリカー、香水の香りづけに使われている。

著者が経験したところでは、クマリンの香りや結晶を研究することより“5月のカップ (Maibowle)”を作って、利き酒をすることの方がはるかに学生たちを満足させるようである。そこでその処方を示そう。

4-6人分なら、クルマバソウ(の花序)2房、砂糖150-200g、オレンジ1個とレモン1個(またはレモン2個)、モーゼルワイン(または他の軽い白ワイン)3本、ゼクト(発泡ワイン)1/2本か炭酸水小瓶1本。

クルマバソウはさっと洗い、数時間陰干しする。根本を長い縫い糸でしばり、瓶(梅酒用の瓶が適当)の中に垂らす。そこへ大きじ5杯の砂糖と1個分のレモンかオレンジの絞り汁を加え、ワイン1瓶を注ぎ込む。莖の断面から苦み物質がワインに溶け込まないように糸を引き上げ、切断面が液面より少し上に出るように固定し、瓶のふたをして、2時間ばかり冷たい場所(冷蔵庫)におく。その後、クルマバソウをボウルに取り出し、その上に残りの砂糖を振りかける。2本目のワインと残りのレモン汁を加え—こでも切断面が液面の上に出よう注意して—このボウルも蓋をして冷やす。2時間後、漉し網を使ってボウルの中身を最初の瓶の中に注ぎ込み、そこに3本目のワインを加え、供する直前に氷で冷やしたゼクトか炭酸水を加える。

資料1. 1937年録音のモーリッシュのラジオインタビュー

ウィーン市ブルクガルテンの日本庭園にて1937年5月26日 (Österreichischer Radioverkehr A. G. Wien)

モーリッシュ：…ジャスミンの枝を…。私たちは普通ブーケにしますよね、日本人も生け花をやりますが、このようなおいの強い花を知りませんし、第一、そんなものを美しいとは思わないのが特徴ですね。

日本人はひとつの花瓶にたった一本の花をつけた枝をいけるか、何も花の付いていない枝を花瓶に挿すのを好むんです。

一方、ブーケでは沢山花の咲いた枝を濃密にアレンジして花瓶のようなものに挿しますよね、こういうのは彼らには全く異質なんです。

記者：先生は…研究所員に、私はつきりフジの花を…。

(前略)

モ一：ええ。かつて一度、フジを見にくるよう招かれたことがあります。フジは最も好まれている日本の植物のひとつです。フジはふつつ棚に引き回します。藤棚というのですが、そこから下に花房を垂らすのです。ヨーロッパのものよりはるかに長い花房ですよ。1mくらいありましたかね。

ある時、研究所員に案内されて見事なフジが咲き誇っている家に招かれたとき、その家の女主人に乞われたんです*1。研究所員が決して花に触れないようにと。私が「どうしてですか？」と問うと、彼女は言ったのです。「はい、花に触るとその魂が失われてしまいます」と。ことほどさように、日本人は自然や植物が魂をもっているように感じているのです。もう一例を次のようなエピソードでお示しましょう。

東京にいたとき、彫版師たちの祭りがありました。版木はサクラの材を使って仕上げるのですが、その祭りではまず伐ったサクラを拝みたたえるのです。サクラの魂を鎮めるためにミサを執り行ったのですね。ここからもおわかりでしょう、日本人には植物も魂を持った存在なのです。

記者：あの、何か特別の役割が…。ほら、ここの日本の家屋のスケッチにも盆栽の絵が描かれています。それに、庭の中央部はコケや石で覆われて、そこに、小川か池を思わせるものがあって、その先には橋まで架かっています。先生、いったい、盆栽は、…これが私たちには最も奇妙なことなのですけど、…ラジオ聴者の多くが今や花屋さんやたぶんご自宅でも盆栽を持つようになり、見るようになりましたが、盆栽とは、自然を縮小し、自身をも矮小化して、こじんまりしたものにしてしまうという、これこそが日本人が非常に高尚な文化を持っていることの証明なのでしょうか？それに、盆栽は明らかに細かいところまですごい老木なのに、実はほんの50cmにも満たない。いったいどうしたら、そんな矮化が可能なのでしょうか？日本人はどうやって作っているのでしょうか？

モ一：日本人は小さいものや風変わりなもの、それにグロテスクなものを偏愛するのです。日本人は小さいものが好きですね。それに彼ら自身も小さい。それに、植物もできることなら小さいまま老成しているように見せたいのです。それが盆栽の栽培法へ向かわせたのでしょう。高山の植物（例えば樹木）を栽培するにはあまり高くしてはいけませんが、老成させなければならぬ。このような栽培法を日本人は完璧に理解しているのですね。……

すでに花が咲いた枝を挿し木するのでこういうことができるのです。この挿し木は母樹の自然を記憶していますから翌年、同じように再び実をつけるのです。

ああ、あなたの質問にもうすこし先までお答えしたほうがよいですね。これは日本庭園でも同じです。この松柏類は大変特徴的です。だけどまさにそのために、庭師は決まった様式に刈り込んで側枝を水平に伸ばすのです。冬になると雪が積もりやすから、これはある意味で大変不都合です。しかし、日本人は雪で垂れ下がった枝をことさら愛でるのです、このような拷問をうけての成長をね。(中略)

記者：それに、植物の外にこの日本庭園には、その、いつも、小さな橋と水とかがありますね。

モ一：このように日本人は自然に対する大きな愛情を持っていますから、植物のない自然は思い浮かべることさえできないのです。誰もが庭を、自分のための小さな庭地を所有できるわけではありませんね。それで、このようなとき、日本人は自然を小さな空間に再現しようと試みるのです。日本人はたぶん1m²ほどの盆を持っています。で、その上に一鉢の盆栽を置きます。これは日本人の庭に対する特徴的動機とでも言えましょう。ほら、そこに滝が見えます、そこに小さな橋が見えます…。そして、盆栽も。要するに日本庭園の特徴をこの小さな空間に取り込むのです。

記者：先生、残念ですが、そろそろこの美しい日本庭園を出なくてはなりません。先生、並びにラジオをお聞きの皆さん、今日は本当にありがとうございました。今日ご紹介いたしましたブルクガルテン(Burrgarten)にお越しになれば、ご自身で中をご覧になれます。この日本庭園がなんと清潔で美しいかをご自身で見て、体験なさいましたら、1時間の話よりはるかに勝ることでしょう。大変な専門家にして枢密顧問官であらせられるモーリッシュ先生、大変ありがとうございました。

モ一：私こそありがとうございました。さようなら。

(原文は F. Sondermann 教授による聞き取り。片岡訳…はノイズのため聞き取れなかったところ)

*1：仙台市青葉区子平町千田文彦氏宅らしい。

資料の公開について

史料館では、公開準備が完了した資料の目録を順次ホームページ上で公開しています。平成21年(2009)4月から21年8月までの間に目録を公開した主な文書は、以下の通りです。これらの資料目録は、当館ホームページ(<http://www.archives.tohoku.ac.jp/>)より入手することができます。

宮城県女子専門学校同窓会収集資料 658点

宮城県女子専門学校は、宮城県第二高等女学校(現在の宮城第二女子高)高等科を母体とするかたちで、大正15(1924)年4月全国三番目の公立女子専門学校として設立された学校。当時北日本唯一の女子専門学校でもあり、東北帝大に入学した女子学生の出身校としても大きな割合を占めていた。昭和9年(1934)年には仙台市八木山(現在の仙台南山高校付近)に鉄筋コンクリートの新校舎が完成し移転。戦後学制改革の過程で東北大学に併合された。



女専裁縫科「東北農村衣服の研究」

資料は、宮城女専同窓会(白楊会)が記念誌編纂や展示会開催等のために卒業生等から収集し当館がこれを引き継いだもの。その多くは寄贈者が在学中に手にした学生生活に関する資料で、校友会の刊行物、教科書、受講ノート、写真、卒業記念の寄書きなどバラエティに富んでおり、昭和初期の女学生たちの学生生活の一端をうかがい知ることができる。原蔵者別に92件の資料群として整理してある。

真島利行文書 408点

真島利行(1874～1962)は、東北帝国大学理科大学初代教授の一人で、戦前期日本を代表する有機化学研究者。東北帝国大学理科大学創設時(1911年)に有機化学担当教授として仙台に赴任し、1933年に大阪帝国大学に転出。1943年には大阪帝国大学総長を務めた。漆の成分ウルシオールなど日本の自然界にある有機物の研究、数多くの優秀な有機化学者の育成等、日本の有機化学研究の基礎を築いた存在と評されている。



資料は①大正3年から昭和34年に至る時期の日記、②日記とともに保管されていた書簡・メモ類、③国内外の知人から真島に宛てて送られた「絵葉書」のコレクション265点、④その他(遺愛品等)の四種に分けられる(但し①・②はマイクロフィルムによる複製資料)。とくに①の日記は、研究・教育や学術行政に関わる真島の広範な活動を具体的に跡づける、大学史・科学史研究の第一級史料。③も、国内外の科学者等と真島の交友関係や在外研究中の真島の活動を跡づける重要資料である。2007年に御遺族から受贈(一部は吉原賢二名誉教授の仲介による)。



※写真はキール大学留学中にベルリンの本多光太郎・日下部四郎太から贈られた年賀状

杉山晃一教授収集 東北大学学生運動関係資料 620点

1960年代末から80年代初頭にかけて東北大学学内において配布された学生運動等に関するビラ・チラシ類を集成したもの。杉山晃一元文学部教授が在任中に収集した資料を1995年に受贈した。全共闘運動が全国的な展開を見せた1968年から1983年に至る時期の、学生運動の各党派、および関連団体の配布物が広く収集されており、当時の東北大学における大学紛争・学生運動の状況を知る手がかりとなる資料。



史料館のうごき(2009.4～2009.8)

○萩ホールギャラリー展示「せんだい学生今昔ものがたり」

6月1日から7月31日にかけて、創立百周年記念会館としてリニューアルされた「川内萩ホール」(旧創立五十周年記念講堂)のギャラリー展示の一環として標記展示会を開催。旧制二高や魯迅の留学などを含む、明治時代から現代までの学生生活の移り変わりを、最近の新収資料を含む約60点の資料・写真と映像ビデオで紹介しました。本学オープンキャンパスが行われた7月30、31日には会場に多くの高校生が訪れ、かつての学生たちのすがたに目をとめていました。



○平成21年度の法人文書評価選別移管作業を行っています

平成20年度末に保存期間を満了した本部その他の部局の法人文書に対する評価選別作業を実施し、歴史的公文書として評価した文書を史料館へ引継ぎました。これらについては、すでに移管されている他の文書とともに内容等に関する点検調査を行い、その後閲覧に供する予定です。



○全学教育科目「歴史のなかの東北大学」

平成19年度以降全学教育科目(カレントトピックス科目群)の一環として実施している「歴史のなかの東北大学」を第1 Semesterで開講しました。昨年同様東北大学の誕生や戦前の学生生活、女子学生や留学生たちの活動、戦中戦後の大学と学生といった講義に加え、今年度は、授業最終日に野家啓一理事による特別講義「東北大学の過去・現在・未来」を開講しました。この特別講義は受講生以外にも公開され、現在の東北大学が抱える課題や将来構想について、中世ヨーロッパ以来の「大学」や「科学」の歴史の流れをふまえた解説に、受講生たちも興味深そうに聞き入っていました。

○新収・新公開資料展示コーナー ※回数は昨年度からの通算

展示室内の新公開資料展示コーナーにて、整理が完了し新たに公開を開始した資料の速報展示を行っています。今年度はこれまでに下記の3回にわたり展示を行い、成果の公表を行いました。今後も公開準備が整い次第継続していく予定です。

第5回 東北大学第一期生の学業生活—創立期理科大学の受講ノートと卒業式答辞(西谷(大上)茂喬関係資料)

第6回 カール・レーヴィット—仙台ゆかりの哲学者の遺品(柴田治三郎文書追加公開分)

第7回 戦中・戦後の旧制二高校長とその周辺—野口明文書より—

片平まつり2009参加企画「片平たてももの見学ツアー」開催のお知らせ

10月10日(土)、11日(日)の両日、片平キャンパスを中心に、「片平まつり2009(東北大学付置研究所一般公開)」が開催されます。このイベントの参加企画として、史料館では、片平たてももの応援団の協力により「片平たてももの見学ツアー」を開催します。片平たてももの応援団と史料館スタッフの案内で、キャンパス内の歴史的建造物や史跡を廻ります。ふるってご参加下さい。

日 時：10月10日(土) 13:00～14:30

10月11日(日) 10:30～12:00および14:00～15:30

集合場所：史料館1階左側講義室 参加申込不要

なお当日は企画展「マンボウ青春記の仙台—北杜夫と東北大学医学部—」も開催中です。詳しくは8ページを御覧下さい。

秋の公開イベントのお知らせ 土・日・祝日を含め毎日展示室を公開

企画展 マンボウ青春記の仙台—北杜夫と東北大学医学部—

『どくどくマンボウ航海記』などで知られる芥川賞作家・北杜夫は、昭和23年、東北大学医学部に入学するため仙台にやってきました。この当時のことを、後に『どくどくマンボウ青春記』に書いています。今回はこの本をとおり、彼が在学した昭和20年代の東北大学そして仙台について、写真・関連資料等を展示します。

2009年9月10日(木)～11月13日(金) 開館時間10:00～17:00(土・日・祝日は16:00まで)



北杜夫と松本高校以来の仲間



昭和25年大学祭



北杜夫自筆「創作ノート」
(世田谷文学館所蔵)

展示関連イベント

いずれも史料館1階 来聴無料(事前申込可) 詳細はHP <http://www.archives.tohoku.ac.jp/>

9月12日(土) 14:00～15:40

講演会 どくどくマンボウ家の素顔 齋藤 由香氏(エッセイスト・会社員)



10月4日(日) ①11:00～ ②14:00～(2回公演)

演劇 セリニアンの隠者 ときめく春の宵—どくどくマンボウの仙台— NPO 法人劇団仙台小劇場

10月24日(土) 14:00～16:00

展示ガイド「マンボウ青春記の仙台」 曾根原 理(史料館)・石垣 政裕(経済学研究科)

史料館ガイドブック「歴史のなかの東北大学」「魯迅と東北大学」を刊行

史料館ガイドブック『歴史のなかの東北大学—大学と学生の一世紀—』(300円)、『魯迅と東北大学—歴史のなかの留学生—』(日本語版/中文版 各260円)を刊行しました。史料館の常設展示の内容をもとに、東北大学の誕生から現在までの大学と学生の歴史をビジュアルにまとめたものです。お近くの東北大学生協同組合店舗にてお求めください。



東北大学史料館だより 第11号 2009年9月11日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022(217)5040

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL <http://www.archives.tohoku.ac.jp/>